
アメノヒトヒラ

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメノヒトヒラ

【Nコード】

N1920M

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「あー、どこかに格好よくて、金持ちで、いつまでも私を大切にしてくれて、私の言う事なら何でも聞いてくれる男いないかなー」
神村律子はコーヒーを飲みながら、雨の降る窓の外を眺めていた。
そして、そのぼやきをつつ込むために一人の男が部屋に入ってきた。

「あー、どこかに格好よくて、金持ちで、いつまでも私を大切にしてくれて、私の言う事なら何でも聞いてくれる男いないかなー」

神村律子はコーヒーを飲みながら、雨の降る窓の外を眺めていた。

そして、そのぼやきを突っ込むために一人の男が部屋に入って来た。

「いませんよ。そんな男」

「でも、この世界には腐るほど男の人いるのですから、一人くらいならいても良いじゃないですか、熊谷先生？」

「本当にいるなら会ってみたいものです。それはそうとお客さんですよ、神村先生」

「お客さん？」

熊谷の白衣の後ろに隠れていたのは小さな女の子だった。

女の子は熊谷の白衣をしつかりと掴み、ちらちらと神村を覗き見る。

「昔の患者さんですか？それとも親戚の子とかですか？」

「いや・・・知らないですね」

「そうなんですか？ああ、そうそう。ここのタオル借りますね？」

雨に打たれたのか、その女の子はずぶ濡れであった。

熊谷は頭からタオルをかぶせ、女の子の頭を拭いてやる。

女の子は手を熊谷の手に重ね、目をつむる。

「何か熊谷先生っていい父親になりそうですね？」

「ああ、何故か良く言われます。でも、その前に恋人もいないんですけどねえ」

「・・・私になってあげましょうか？」

「これで大分乾いたかな。あとは着替えだけど、ここには君のサイズに合うようなものは無いからなあ。どうしようかな・・・ああ、

神村先生、本当にこの子の事知りません？」

「知りません」

「そっか。君、本当に神村先生に用があって来たの？」

女の子はこくりとうなずく。

そして、恐る恐る神村に女の子は近づこうとするが、神村はギンッと睨みつけるので、また熊谷の背に隠れるのである。

「何こんな小さな子に威嚇してるんですか？」

「だってえ〜」

「だってじゃありませんよ。もう。昼間っから酔っぱらってるんですか？」

「酔っぱらっていません」

「じゃあ、ちゃんとこの子の話を聞いてあげてください。大丈夫。

おじちゃんが付いているから、怖くないから」

女の子はもう一度こくりとうなずく。

「おじちゃん。律子、今晚は一緒にお酒飲みたい？」

「今晚も、でしょ。いい加減ふざけないでちゃんと聞いてあげて・

・」

「分かったわ。もち、熊谷先生の全おごりで」

熊谷は大きくため息をついた。

それから女の子は神村に耳打ちをし始めた。

ふむふむ、うんうんと何だか神村は納得したようで、急に立ち上がり宣言する。

「熊谷先生、外に出るわよ」

熊谷は女の子と共に神村に散々連れ回された揚句、たどり着いたのは近くの公園だった。

「居たわね。貴方の探してたのはそこよ」

神村が指差したのは公園の遊具。

滑り台やネット、吊るされたタイヤ等がくつついた遊具。

その中の一つのトンネルを女の子は覗きこむ。

そして、その顔がぱあっと明るくなった。

トンネルから出てきたのは同じ顔をしたもう一人の女の子。

「良かったわね」

そう神村が言うと、二人は深くお辞儀してその場を去っていった。

「双子？一体何だったんですか？私には何が何だか・・・」

「熊谷先生はアメノヒトヒラって知らない？」

「・・・知りません」

「雨は『降る』ものよね？」

「え、ええ」

「そして、雨は『止む』もの。最初に私達の元に來たのが『降る』方で、さっき見つけたのが『止む』方。彼女達は二人で一對なの」

「・・・それってあの子達が人間じゃないってことですか？」

「そうなるわね」

「だって、先まで私にも見えてましたよ！」

「そうね。おかしいわね。よほど彼女が困っていたのか、それとも熊谷先生が・・・」

「も、もしかして今のは全部神村先生のホラ話とか・・・そんなこと・・・ないですかね？」

「そう熊谷先生が思いたいならそれでいいと思いますが」

うやむやにごまかされて、熊谷は腑に落ちない様子だ。

一方そんな事は気にしていない様子の神村は天を見ていた。

「そろそろ『止む』わ」

神村の言葉通り、先程まで降っていた雨が止んでいく。

偶然？

それとも空を見ていれば分かる事？

それとも・・・

熊谷の心の中は三つ目の選択肢を信じようとしていた。

「神村先生って本当に一体何者なんですか？」

「何者ってどういう事です？」

「何か、神村先生って人離れしていると言つか。もしかして本当は妖怪だったり、とか思ってしまうんですね」

それは冗談のつもりで言った一言。

しかし、神村は熊谷の言葉ににこりと笑って見せる。

「ま、まさか本当に妖怪なんですか？」

「さあ？熊谷先生のお好きなように」

そう言つて神村律子は差してきたビニール傘をくるくると回しながら、その場を後にするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1920m/>

アメノヒトヒラ

2010年10月10日19時40分発行